李輝英「万宝山」――事実と虚構のはざま

岡　田　英　樹

はじめに

李輝英（本名李連萃）は、3、40年代に抗日作家として活躍し、多くの作品を残しているにもかかわらず、中国現代文学史上あまり語られることはなかった。おそらくそれは、中華人民共和国成立直後（1950年）に、香港に移住したという経歴が影響しているかと思われる。しかし、かれの長篇小説「万宝山」だけは例外で、多くの文学史が抗日文学の先駆けとして記録にとどめてきた。それは、1931年の「柳条湖事変」（「九・一八事変」）勃発後、いち早く抗日をテーマとして、万宝山事件――東北地域への侵略をねらった日本側の策動――を採りあげた点が注目されたからであろう。さらにいえば、李輝英は東北吉林省の生まれであり、作品には奪われた生まれ故郷の失地回復、という願いが込められていた。1935年以降、「満洲国」を脱出して上海に流れてきた蕭軍、蕭紅、舒群、羅烽、白朗といった作家たちが、文壇に受け入れられるなかで、「東北作家群」という呼称が定着するが[1)]、こうしたグループの先駆けという位置も与えられている。ここでは、そうした李輝英の「万宝山」を採りあげ、作者が一つの歴史的事件から何を読み取り、何を訴えようとしたのかについて考えてみたい。

1、小説「万宝山」が生まれた経緯

李輝英は自著『中国現代文学史』のなかで、「東北作家群の出現」という一節をたて、その冒頭でこのように述べている。

> 東北を舞台として、反日の題材を最初に描いたのは、1932年に「最後の授業」（「最後一課」）という作品を『北斗雑誌』に発表した李輝英であった。（中略）同年、また長篇「万宝山」を出版したが、それは長春に近い万宝山を背景とした作品であり、朝鮮人が水田を強引に借り受け、わが農民との衝突を引き起こし、「九･一八」事変発生の導火線となったといえるものであった。この本は、林菁（華漢）の「義勇軍」、鉄池翰（張天翼）の「歯車」とともに、丁玲が編集した叢書であったが、わずかにこの3冊が出されただけであったようだ。万宝山を創作の主題としたことは、現実的な意義があったが、作者は当地の状況を熟知しておらず、発生した問題に対する分析能力も充分とはいえなかったので、作品にいくつかの欠点が見られることは推して知るべきであろう[2)]。

「同年」（1932年）とあるのは誤りで、出版は1933年3月である。しかし、文末に記された脱稿の

日付は、「二十一年（1932年）五月卅日」で、前年の柳条湖での鉄道爆破事件に始まり、東北を席捲した関東軍の後押しを受けて、「満洲国政府」の名を以て「建国宣言」が発せられて（3月1日）、二ヶ月を経たばかりである。おそらく李輝英は、同郷人の安否を気遣いながら、戦況のゆくえを見守っていたであろう。そのなかで「万宝山」は書き上げられたのである。

また作者は後年、小説『松花江上』（香港版）の「後記」において、この小説執筆のいきさつを詳しく述べている。

上記の処女作「最後の授業」が発表されて以降、雑誌『北斗』の編集者丁玲と親しくなり、多くの文学者とも面識を持つようになった。そしてある日、丁玲は手紙で、「東北を舞台として、反日をテーマとした長篇が書けないか」といった提案をしてきた。長篇を書き上げる自信はなかったが、心を躍らせながら「材料を探すことからはじめ、なんども削ったり増やしたり、なんども書いては手を入れて」二ヶ月半後には完成させ、原稿を編集者に送った。

> 原稿を提出するとき、わたしは手紙を添えて、編集者の方で大いに手を入れて修正を加え、使えるものなら使い、使えないものなら送り返してくれるようにと、丁寧に希望を述べておいた。編集者は大幅に修正してくれたのであろう、わたしの原作の基本は、いかんともしがたいほど大きく違ったものになっていた[3)]。

1932年当時、丁玲はわずか25才であったが、すでに「夢珂」（27年）、「莎菲女士の日記」（28年）といった作品を発表し、30年3月に発足していた左翼作家聯盟にも参加しており、上海の左翼文壇では、注目されていた女性作家であった。一方李輝英は、20才になったばかりで、上海の中国公学大学に在籍中の学生であった。無名の新人を発掘し、左翼作家を育て上げようとする若き編集者丁玲と、その激励を受け、勇躍して長篇に取り組んだ若者の姿が目に浮かぶ。丁玲の添削が、どの程度のものであったかは不明だが、彼女の手も加わって作品が完成したことは押さえておきたい。

またこの回想文のなかで、作品が発表された後、茅盾の手厳しい批判（後述）を受けたとして、李輝英はつぎのように反省している。

> その当時わたしは、新聞に載った朝鮮での排華事件や万宝山事件の新聞からの素材を青写真として、その上に家を建てたのであった。精密な分析や考察はまったくやれなかった。ただ、こうした作品を書き上げて、中国農民の日本帝国主義者に対する反抗精神を伝えたことは、充分な意味があったと思っている[4)]。

すなわち、テーマをゆっくり温める余裕もなく、新聞記事を取材源として性急に書き上げられたことが見てとれるだろう。

2、万宝山事件の概要

李輝英が素材とした万宝山事件（1931年）は、二つの局面に分けられる。一つは、この当時日本政府は、中国東北地域に朝鮮人移民を送り込んで、勢力の移植をはかろうと画策していた。その結果、

移住した朝鮮人と現地中国人との間に小競り合いが頻繁に生じていた。万宝山事件の場合、その小競り合いが、武装した日本警察との衝突事件にまでエスカレートしたのである。中国側の資料では、事件当日の様子が、以下のように記述されている。

> 7月2日早朝、日本の武装した警察官4、50人が、中川義治に率いられ、銃を持って馬家哨口一帯に布陣した。8時頃、農民が孫栄卿、曲淞楼などに連れられて、鋤をかついで前に進み溝を埋めようとした。中川は武装警官を連れてそれを阻止し、あわよくば孫栄卿らを強制的に逮捕しようとした。農民たちは騒ぎ立て、どっと前に押しかけ、日本の警察官を取り囲み、孫などを奪い返した。中川はついに警察官に命令を下し、農民たちに発砲する姿勢を示した。農民たちは少し引き下がったが、みんなの憤激は高まり、身につけた手製の銃で反撃しようとするものもいた。双方は1時間あまりにらみ合っていたが、死傷者はなかった。その後、中国側警察の勧告により、農民たちは解散して家に戻った。
>
> 今回の事件で、日本警察官、朝鮮人に死傷者は一人もなかった。中国の農民には日本の警察官に殴られケガをしたものが数人出て、また数人が警察に捕まえられたが、長春市公安局第三分局から人を派遣し、連れ戻した[5)]。

二つ目の局面は、日本側は、この衝突事件を誇大に宣伝して朝鮮人と中国人の対立を煽り、あわよくば東北における朝鮮人保護を口実に、軍隊を動員することをたくらんだ。その結果、朝鮮の主要都市で中国人の排斥運動が起こり、かなりの死傷者が出た。また中国においても朝鮮人を襲撃する事件も発生した。しかし、朴永錫はこの後半の事件を詳細に分析して、次のように結論づけている。

> 以上で見た如く、最初は朝鮮で中国人の排斥運動が相当に大きく発展するものと見えたが、東亜日報をはじめとする言論の活動、韓国の民族指導者たちの活躍及び各社会団体の活動と華僑自身たちの慎重なる態度、南京政府の汪公使派遣による真相の把握等によって、朝鮮での事態は予想以上に速やかに収拾されたのである[6)]。

歴史的に見れば、国民政府の利権回収政策を背景に、朝鮮人移住農民と、現地中国人農民との間で、土地をめぐっていくつかの事件が発生しており、万宝山事件の土地商租権問題も、そうしたトラブルの一つであった。ただこの事件の場合、日本側が朝鮮日報の記者金利三に捏造記事を書かせるなど、中･朝の対立を扇動して事を起こそうとした後半部分の事件が、外には見られぬ特徴であったといえる。しかし、李輝英作品では、第一の局面にのみ注目し、第二の局面については、「続けて、日本帝国主義は韓人をそそのかして韓国にいる華僑を虐殺するという惨劇を引き起こした。あちこちで流された赤い血が溝となり、小川となって流れ、真っ赤な太陽さえ、片目を閉じて、注視しようとはしなくなった。」[7)] という描写にとどまっている。

それでは、土地をめぐる中国と朝鮮の農民同士の対立を、李輝英はどう描いたのであろうか。

3、小説「万宝山」の世界

この事件を李輝英は、中国を侵略し、それを拠点に、ソビエト社会主義政権の打倒をねらう日本帝国主義と、中国農民の戦いという構図でとらえようとした。そうした複雑な国際的政治背景を解説し、闘争の重要性を説得する役割を担っているのが、村に派遣された、師範大学の学生李竟平である。かれは、農民のリーダーである馬宝山の家に村人を集め、次のような演説をおこなう。

「日本は万宝山を占拠した後、すぐに頭道溝（長春の日本租界）と抱き合わせて租界のなかに取り込もうというのだ。さもなければ、頭道溝に近い避暑地、あるいはその防御地帯とするんだ。うまいことに、ここから北に向かえば、哈爾濱に侵攻できるし、西に向かえば扶余に至り、河を渡れば江省を占領できる。みろ、これが日本の巧妙な企みなんだ。そして1、2年後には、吉林と江省の境界地域を占拠して、それから大鼻子と戦争しようと考えているのだ。」（126頁）

「大鼻子」とは、ロシア人の俗称で、日本の真の目的は、その「××国」（ソ連邦）と戦い、「大鼻子の主義」（社会主義）を打ち壊すことにあるという。そうしたもくろみを持つ日本帝国主義を打ち倒すためには、

「民衆の力を団結させ、しっかり武力を蓄え、一旦有事の際には、自分たちの手で、反撃し、闘うのだ！それしかないのだ、お上に頼ってはだめだ。お役人なんか、かれらと同類だ。おれたち自身の力こそがかれらに打ち勝ち、かれらを消滅させられるのだ。かれらはみんな民衆をだます同じ犬どもなんだ！」（129頁）

と、演説を締めくくった。

馬宝山をリーダーとする農民たちは、この李竟平の言葉に導かれながら、武装革命闘争の道を歩んでいく。

もう一点重要なことは、水田開発のために水路を掘る朝鮮人を、監督官と苦力に区分して、その間の階級的矛盾を執拗に描いたことである。苦力たちは、苛酷な労働と貧しい食べ物のなかで、悲惨な生活に追いこまれ、逃げ出すものもおり、病で死んでいくものもいる。少しでも不満をもらすものは、租界の日本の警察に送られてしまう。あまりにもひどい境遇に、いつしか、万宝山の農民たちもかれらに同情するようになっていた。

こうした変化は、この地の中国人農民に、強い同情心を引き起こした。棺桶を作り、埋葬地を探し、運んでやる。これらは死人に対する善行である。まだ死んでないものに対しては、季節当たりの病の薬を探してきてかれらに渡してやったり、野菜やわずかな食べ物を与えてやったりした。かれらを、疑ったり、恐れたりする村人は一人もいなくなった。上は馬宝山老人から、下は一才の子供まで、みんなかれらを憐れむようになり、胸一杯の同情心を抱くようになった（158頁）。

こうして生まれた階級的連帯感を伏線として、中国人農民の蹶起に朝鮮人苦力がともに武器を持って参加するというクライマックスが導き出される。その蹶起参加への説得に当たるのが、万宝山に移住し、中国人とともに生活してきた朝鮮人農民金福であった。

「同胞たちよ、今すぐに目覚めて、われら個人の自由を取り戻すのだ！かれら中国の兄弟たちは、全て計画を立ててくれている。お前たちが加わることを歓迎してくれている。まず、わしらを蔑ろにしてきた人夫頭の犬どもを殺すのだ。さらには、蕭翰林一派の中国人の走狗どもを殺すのだ。」（242 頁）

こうした金福の説得に応じて朝鮮人苦力たちは、人夫頭の家を壊し、鉄拳を見舞い、さらには中国人地主の蕭翰林の家を焼き討ちにした後、農民たちの自衛軍に合流した。

このようにして、日本の警察官 30 名、中国の警察官 3、40 名を釘付けにしたまま、水路を埋める作業は完成した。つぎは闘争に勝利した、かれらの雄叫びである。

「日本帝国主義を打倒しよう！」
「全ての帝国主義を打倒しよう！」
「中韓の被圧迫民衆は団結しよう！」
「……」
「中韓民族の解放万歳！」
「全世界の被圧迫民族の解放万歳！」（244 頁）

しかし、このまま農民軍の勝利で終われば事実に合致しない。そこで事実にはない、7 月 3 日の出来事が付け加えられることとなる。

翌日、中日双方から 400 名の警察隊が増派され、鎮圧に向かった。これに対して農民側は、武装闘争には参加せず水路を埋める任務にあたった部隊は、家に戻り普段通りに農作業にあたった。そして武装自衛軍に加わった部隊は、馬宝山に率いられて村を去る、という結末で締めくくられる。そして最後は、

万宝山の工事は、ふたたび再開されることはなかった。さらにその後、予期せぬ事変の発生を受けて、いつの間にか頓挫してしまった。抑圧された農民大衆は、こうした刺激を受けて、さらに多くの人が目覚め、反抗に起ちあがり、闘争に加わった。それ故、かれらは退却したが、それは決して失敗したのではなく、最終的には一つの成功した事件であった。（251 頁）

という形にまとめ、万宝山農民たちの蜂起は、多くの農民を目覚めさせ、革命闘争の広がりを生みだすことになったとしている。

以上が、小説「万宝山」で描かれる事件の骨格である。李輝英は、学生李竟平と朝鮮人農民金福という突出した人物をリーダーとして配置することで、この万宝山事件を、中国人農民と朝鮮人苦力の連合による革命闘争というストーリーに仕立て上げた。しかしこの事件を、こうした階級史観

の構図に組み込もうとすればするほど、小説は事実から乖離せざるを得ない。しかしその一方で、作者はこの小説が事実にもとづくものであることを、むしろ強調しているように思われる。例えば、多くの人物を実名で登場させているし、郝永徳が中国人の地主と交わした契約書（69 頁～ 73 頁）、同じく郝永徳が朝鮮人に土地を譲り渡した契約書（77 頁～ 80 頁）なども、実物から写し取られている。

実際に起こった事件のレポート――中国では「報告文学」、「紀実文学」といわれている――という体裁をとりながら、階級的歴史観に基づく図式に事件を押し込めることには無理がある。むしろ現実が持っていた社会構造の複雑さや、矛盾をそぎ落とすことになったといえるだろう。

4、虚構と事実のはざま

まず、作者には日本の侵略に対して無抵抗主義を貫く蒋介石国民党政府に対する強い批判があったと思われる。そのことから、万宝山の農民たちの土地を保護するために、長春県政府や公安局がおこなった日本領事館への抗議や実地調査などは全て無視している。そして日中間の官僚的馴れ合いが強調され、最後には日本と中国双方の警察隊が一体となって農民軍の鎮圧に向かう、といった場面までが描かれる。その結果、日本と中国両国間に生じていた国際的な矛盾や緊張感が曖昧にされてしまっている。

「中・朝両民族の圧迫された民衆の連帯」というテーマを押しだすために、朝鮮人農民という事実を消して、水路工事を請け負った人夫頭と苦力の集団に置き換えた。したがって苦力たちは、水田の完成には直接的な利害関係はなく、水路を埋め戻す行動に躊躇することなく結集できたのである。しかし現実は、土地を奪われ、耕作する水田を求めて移住してきた朝鮮人の農民たちである。一方は、自分たちの耕地に無断で水路を築かれ、水路の変更で生じるかも知れない洪水の恐怖に怯える中国の農民たちである。土地をめぐる農民たちの民族的対立は、双方とも死活問題につながる深刻なものであったはずだが、その側面がそっくり切り落とされ、階級的連帯感に解消されてしまった。

つまり、権力者対被抑圧者、被抑圧者の連帯という構図に収斂させるために、現実問題がはらんでいた複雑な要素――権力者・被抑圧者双方に存在していた内部矛盾――が汲みとれず、単純化されてしまったといえるだろう。

また事件の背景を明らかにするため、無理に登場させた学生李竟平も、演説するだけの平板な存在であり、朝鮮人農民の金福も、父親が語る悲惨な境遇――5 人息子のうち 4 人までが、抵抗運動のなかで日本人の手によって殺された――で、日本人への反抗心にリアリティーを持たそうとしているが、あまり効果的ではない。

さらに農民革命軍の勝利を強調するために、水路は埋められたままであったとする結末――現実には、「7 月 11 日、日本警察の監視のもと、用水路工事は完成し、即日放水が始まった。」[8] とされる――、さらに農民のリーダー馬宝山が、自衛軍を引きつれて村を出て行く――抗日パルチザンに加わることを暗示している――などは、現実との乖離が大きく、無理があるといわざるを得ない。

まとめ

作品を読み込んでいくと、かれが立てた構想には無理があり、その結果、ストーリーの破綻や平板な描写に終わっているとの評価を下さざるを得ない。もちろんこれは創作をはじめたばかりの未熟さがもたらしたものであろうが、こうした階級的視点で中国社会を描くことを、当時の文壇が強く求めていたという時代の風潮も見ておく必要がある。茅盾はこの作品を採りあげて、「東北の社会状況を描きながら、日本帝国主義の経済力が独占的に支配し深く食い込んでいる状況を忘れているのは大きな誤りである。」[9] と、東北全体が構造的に描かれていないことを批判するが、その一方で、つぎのような積極面を評価している。

> 作者は万宝山の農民が、圧迫された朝鮮人の農奴に対して、「階級的同情心」がどうして生まれてきたのか、そして最後には一つの戦線がどうして成立したのかを描いた。作者は、階級意識が民族意識を克服するという点に努力した。もし万宝山という小説に採るべき所があるとすれば、この一点にしかないのかもしれない[10]。

つまり、階級的統一戦線の立場で、作品を作りあげたことを「採るべき所」として評価を与えているのである。また冒頭でも述べたように、丁玲も作品の草稿を読み、修改作業にかかわっている。彼女自身も、階級性を前面に押しだすことに協力していたといえるであろう。このように見てくると、「万宝山」の未熟さは、単に李輝英の未熟さにとどまるものではなく、当時の中国左翼文壇の未熟さをあらわしているといえるのかもしれない。

こうした「事実をふまえた創作」（紀実文学）は、事実と虚構の間でどうバランスをとるかは、難しい問題である。伊藤永之介の「万宝山」[11] は、中国側警察官や農民に襲撃され、日本側からも見捨てられた朝鮮農民の悲惨な状況を描き、同じ事件を題材としながら、李輝英とはまったく異なる作品に仕上げている。しかし伊藤は、「万宝山」を題名としているが、その叙述においては、架空の地名を使うなど、極力フィクションという面を強調している。李輝英も、事実に束縛されることなく、虚構の世界として描ききれば、また別の展開が可能であったかもしれない。

注

1）1936 年 9 月に、上海の文芸雑誌『光明』（上海生活書店）が附録という形で、東北出身作家の短篇小説集『東北作家近作集』を出版した。これをきっかけに、「東北作家（群）」という名称が定着したといわれている。

2）李輝英『中国現代文学史』香港東亜書局　1976 年 2 月（再版）186 頁

3）李輝英『松花江上』香港東亜書局　1972 年 10 月（改訂・再版）3 頁

4）同注 3）5 頁

5）『苦難与闘争十四年』上巻　中国大百科全書出版社　1995 年 7 月　112 頁

6）朴永錫『万宝山事件研究――日本帝国主義の大陸侵略政策の一環として』第一書房　1981 年 3 月 30 日　126 頁

7）李輝英『万宝山』上海湖風書局　253 頁（わたしの手持ちのコピー版には奥付がついていないので何版か不明である。以下の引用は、ページ数のみ記しておく。）

8）同注 5）113 頁

9）茅盾「“九・一八”以後的反日文学《万宝山》」『東北現代文学研究論文集』遼寧大学出版社　1986 年 6

月 9 日　51 頁（原載『文学』1-2　1933 年 8 月 1 日）
10）同注 9）53 頁
11）伊藤永之介「万宝山」『改造』1931 年 10 月

【追記】

わたしが立命館大学に赴任したのは 1976 年 4 月であって、石井さんはすでにその前年に着任されていた。爾来 30 数年間、同じ外国語パートに籍を置き、親しくお付きあいさせて頂いてきた。かれの研究室はわたしの斜め前にあり、いつもその前を通って自分の研究室に入ることになるのだが、いつもドアの表示は「在室」となっていた。そればかりではない。たまに土、日などに登校しても「在室」の表示で、室内から音楽の調べがかすかに流れてくることもあった。休暇中にも同じような体験を何度か持ったことがある。自転車で通えるという条件もあっただろうが、研究室に通い仕事をするというのが、石井さんの生活パターンであったのだろう。あの几帳面さと仕事熱心さを垣間見る思いであった。

わたしは、2010 年 1 月に文学部の主催で、「退職記念講義」を開催して頂き、その司会を引き受けて下さったのは「パート主任」の石井さんだった。お礼の言葉とともに、「来年はあなたの番ですね」と声をかけていたのだが、それもかなわぬことになってしまった。身辺の整理もかなわぬままこの世を去るというのは、あの論理的で几帳面な石井さんにはたまらぬ人生の終わり方であったろうと思う。黙祷あるのみ。

この論考は、2009 年 9 月に韓国科学技術院（KAIST）で開催された「第 5 回国際フォーラム植民主義と文学――『満洲国』と東アジアの文学」（韓国民族文学研究所主催）で発表したものに手を加えてまとめたものである。「万宝山事件」が中国、日本、朝鮮それぞれの地域で、どのように作品化されたのかを比較検討する試みであった。本来であれば書き下ろし原稿を準備すべきであったろうが、お許しを願って「石井芙桑雄教授追悼号」の一端に加えて頂いた。

（本学名誉教授）